様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年３月３１日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：２００６～２００９
課題番号：１８３３００３８
研究課題名（和文）　ブリテン帝国とアメリカの経済思想とリーダーシップ
:「帝国デザイン」の検証
研究課題名（英文）　British Empire, American Economic Thought and Leadership
: Examination for the 'Design of Empire'

研究代表者
姫野　順一（HIMENO JUNICHI）
長崎大学・環境科学部・教授
研究者番号：００１１７２２７

研究成果の概要（和文）：

本研究は、ブリテン帝国の「帝国デザインに関わる経済思想」と「アメリカの帝国構想」の解明を目指したが、帝国形成期（重商主義期）の植民地市場の経済思想、アダム・スミスの帝国構想、ベンサムやアイルランド経営における 19 世紀中葉の帝国の言説、19 世紀末から戦間期にかけての「自由帝国」および「植民帝国」に関わる言説、福祉国家や改革に関わる社会統合の言説、アメリカにおける国際化とヘゲモニーに関わる経済的言説による「帝国デザイン」が共同研究の成果として解明された。

研究成果の概要（英文）：
The research aims at the clarification of "Economic thought related to the Empire Design" of the British Empire and the United States. There are clarified of languages related to the economic thought in colonial market in the formation of Empire (Mercantilism), and of the Design of Empire in Adam Smith and in Bentham, and also in Ireland management of the middle of 19th century. It also clarified the languages of "Free Empire" put on the period between the end of 19th and two wars in "Immigration Empire". The "Empire Design" of US was clarified in the internationalization and the hegemony in which the social integration influenced to the making of welfare state. Totally "Empire Design" was drew as a result of a joint research on the economic languages of Empire

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2007 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2008 年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2009 年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
年度			
総　計	11,200,000	3,360,000	14,560,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：経済学　・　経済学説・経済思想
キーワード：経済思想・経済思想史

１．研究開始当初の背景

研究開始当時、レーニンの帝国主義論を補完する自由貿易帝国主義論や、ジェントルマンリ資本主義論が登場し、「ブリテン帝国」の経済史的な見直しが進み、Armitage, David (2000) *The Ideological Origines of the British Empire*, Cambridge などの登場により「ブリテン帝国」の「自由帝国」としての見直しの機運はあった。それらに刺激されて 18, 19 世紀の「ブリテン帝国」の性格を巡る研究が進展していたが、「経済思想」に焦点を合わせた研究は少なく、特に 19 世紀末から戦間期にかけての「ブリテン帝国」の「経済思想」の研究はほとんど無かった。また「帝国主義論」に関してはセンメルやコリン・マシュー等の自由帝国主義や社会帝国主義の問題提起がなされており、経済思想史研究の領域では政治思想史における「知性史」Intellectual History 研究の進展を受けて、ポコックやウィンチによる近代の経済言説の歴史的な意義の問い直しも進んでいたが、「ブリテン帝国の経済思想」に焦点を当てた研究が望まれていた。

２．研究の目的

ブリテンからアメリカへの歴史的な覇権の移動を見据えつつ、経済思想に焦点をあて、ブリテンの「帝国デザイン」の内容と歴史的特質を明らかにし、アメリカの「帝国デザイン」と比較し、ブリテン帝国からアメリカ帝国に至る覇権移行の経済思想の意義を明確にすることがこの科研の目的であった。そのためにいわゆる重商主義期（旧帝国主義）における「ブリテン」の「国民」経済と貿易ネットワーク経済の統合された「帝国デザイン」、１９世紀始めの自由貿易帝国主義期の国民経済と国際自由貿易の統合された「帝国ビジョン」、１９世紀末から大戦期にかけての拡大帝国再統合の「帝国デザイン」、帝国維持の費用と効果（財政・租税）の制度設計、国際的な覇権移行の経済思想を解明する。本プロジェクトは経済基盤を拡大させながら国際的な勢力均衡に直面した国（ブリテンとアメリカ）が、「帝国」を維持すべく統治形態と変容させ、国民的な統合を図る場合の経済思想（帝国のデザイン）を研究対象の焦点としている。

新たな視点は１、国民経済と帝国の「経済ビジョン」（帝国像：帝国デザイン）における統合、２、「帝国デザイン」における帝国維持の財政設計の焦点化、３、ブリテンにおける「帝国デザイン」の連続性と変容の解明、４、ブリテンからアメリカ（サブ・ブリテン）への覇権移行の焦点化の 4 点である。

３．研究の方法

本プロジェクトは 18 世紀から 20 世紀に至る「帝国デザイン」に関する文献資料解析と、イギリスおよびアメリカの研究者を招聘したワークショップによる共同研究の方法を採用している。

４．研究成果

ケンブリッジ大学（マーチン・ドーントン, オイジーニオ・ビアジーニ）イーストアングリア大学（アンソニー・ハウ）、ダラム・ハレム大学（ピーター・ケイン）を招聘し、重商主義期から第 2 次世界大戦までの「帝国デザイン」研究の基軸を「帝国の統合」と「帝国の拡大」に絞り、重商主義期の植民帝国の経済思想（熊谷、ケイン）、アダム・スミスの帝国デザイン（堂目）、アイルランドのナショナリズムを基盤とした経済思想とブリテン帝国との関わり（深貝）、19 世紀におけるイギリスの改良思想による国民統合と帝国デザイン（深貝・ハウ）、19 世紀末から 20 世紀初頭における帝国デザインの変容（西沢、姫野、平井、ビアジーニ）、南アメリカにおける帝国マネジメントの受容（ドーントン）、アメリカにおける帝国デザインに関わる大恐慌期の立憲主義の経済思想（若田部）が研究された。

その結果（１）重商主義期におけるブリテン帝国の経済思想（ダブナント、ポレックスフェン、デフォー、ポッスルウエイト、タッカー、デッカー）の解明（熊谷、ケイン）が進み、（２）『道徳感情論』、『国富論』におけるスミスの帝国デザインおよびアイルランド・ナショナリズムに絡むブリテン帝国のデザイン（堂目、深貝、ハウ）が解明され、（３）グラッド・ストーンに起源をもつ自由哲学に立脚する改革思想と帝国管理の経済思想（チェンバレン、マーシャル、ニコルソン、ホブスン）が解明（西沢、姫野、ビアジーニ）された、４）ケインズおよびアメリカの大恐慌期のナショナリズムと帝国デザイン（平井、若田部）が解明された。

代表の姫野は J.A.ホブスンを中心とする帝国デザインを解明し、その成果の一部に組み込んだ著書『人間福祉の経済学　新自由主義の展開』（2010 年）を刊行し、さらにたブリテン帝国史を研究する経済史研究者との交流を深め、その成果を書評論文、「北川勝彦編著『脱植民地化とイギリス帝国』－政治経済思想史との 対話を求めて－」として発

表し、ニコルソンを中心とする帝国デザインを解明した。また深貝はアイルランドを中心としてアイルランド・ナショナリズムと帝国構想を、また堂目はアダム・スミスを中心とする帝国デザインの研究を進め、それぞれ英文論集のドラフトとして完成している。当該年度においてはブリテンの帝国デザインに関する日本側のこれらのドラフトを科研メンバー以外の協力者の分を含めて持ち寄り、英文論集出版に関する打合せ会議を実施した。また　研究代表の姫野とメンバーである深貝と共に英文論集の編者となることを承諾している Martin Daunton; University of Cambridge を招聘し、国際研究集会を実施し、英文論集編集に向けての打ち合わせ会議を実施した。また研究代表の姫野はニコルソンの帝国デザインに関わる資料の補足調査でエジンバラおよびケンブリッジにおける海外調査を実施し、深貝はイギリスおよびアメリカにおける当該研究に関わる調査を実施した。またこの間、若田部は戦間期におけるアメリカの帝国構想についての研究を進めた。本科研の最終成果として出版を準備している英文論集は、ブリテン帝国の「帝国デザインの経済思想」を解明する著書として画期的である。

その内容は以下の通りである。

Title of the volume (tentative): *British Empire, Social Integration and the History of Economic Thought*

Editors: Martin Daunton, Yasunori Fukagai & Junichi Himeno

Part 1: Territory, Trade and Social Integration of the Empire

1. Economic Ideas of the British Colonial Empire in the Mercantile Era, 1689-1783 … Jiro Kumagai (St Andrews University, Japan)

2. National Economy, Peasant and the Land Tenure: Economic Thought of Ireland and British Empire, 1790s-1840s … Yasunori Fukagai (Yokohama National University)

3. The Manchester School and the British Empire … Anthony Howe (University of East Anglia)

4. Tax Transfers: Britain and its Empire, 1848-1914 … Martin Daunton (Trinity Hall, Cambridge)

5. British Economic thoughts and India at the turn of the 19th-20th centuries … Shigeru Akita (Osaka University)Part 2: Negotiating the Strategy for the British Empire

6. Smith's Views and Designs of the British Empire: Two ways to return to the natural liberty … Takuo Dome (Osaka University)

7. The Economics of Anti-Colonialism and Anti-Imperialism in Britain: Josiah Tucker to J.A. Hobson … Peter Cain (Sheffield Hallam University)

8. Imperial design, Social Integration and Economic Thought: The liberal philosophies of William Ewart Gladstone and Joseph Chamberlain … Eugenio Biagini (Sidney Sussex College, University of Cambridge)

9. Rentiers versus Producers: the political economy of Producers' Alliance … Tamotsu Nishizawa (Hitotsubashi University)

10. The New Design of the British Empire in Early Twentieth Century: From a View of Economic Thought … Junichi Himeno (Nagasaki University)

11. International Design and the British Empire: Keynes on the Relief Problem … Toshiaki Hirai (Sophia University)

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

① Masazumi Wakatabe, Understanding the Evolution of Macroeconomic Thinking since 1717: An International Monetary System Perspective, 経済学史研究、52 巻、18-32、2010 年、査読有

② 姫野順一、北川勝彦著『脱植民地化とイギリス帝国』－政治経済思想史との対話を求めて、関西大学『関西論集』、第 59 巻第 3 号、263-272、2009 年、査読無

③ 堂目卓生、いま甦るアダム・スミスの思

想、中央公論、2009 年 5 月号、54-65、2009 年、査読無

④ 若田部昌澄、経済危機の処方箋を大恐慌、大インフレ、大停滞から学ぶ、『エコノミスト臨時増刊　世界景気最前線』、10 月 13 日号、96－105、2008 年査読無

⑤ 熊谷次郎、イギリス重商主義帝国形成期の経済思想――キャラコ論争における植民地市場の意義――、桃山学院大学経済経営論集、49 巻 1 号、３３－７１、2008 年、査読無

⑥ 深貝保則・高島和哉・川名雄一郎、小畑俊太郎、板井広明、「ジェレミー・ベンサム：その知的世界への再アプローチ ――フィリップ・スコフィールド『功利とデモクラシー』(2006 年) をめぐって ――」、『エコノミア』（横浜国立大学）、第 58 巻第２号、25－57、2007 年、査読無

⑦ 深貝保則、帝国と文明のブリテン思想史をめぐる「用語」分析の可能性、横浜国立大学経済学部 Discussion Paper、０７－J-1,1－34、2006 年、査読無

⑧ Wakatabe Masazumi （ With Yong J.Yoon） Adam Smith, Buchanan and Classical Liberalism: An Interview with James M.Buchanan, 『経済学史研究』、第　48 巻第 1 号、124－138、2006 年、査読有

〔学会発表〕（計１２件）

① 堂目卓生、経済学の基礎としての人間研究：学史的考察、日本経済学会秋期大会、専修大学、2009年10月10日

② Junichi Himeno, Social evolution" and Eugenics as language system of Political Economics on Race for the British Empire in 1900's：Chamberlainite vs. New Liberals, The workshop on the Transformation of Liberalism and the New Scheme of Social Integration: Organic View from the Fin-de-siecle to the Interwar Period Examined, Yokohama National University, 27 September 2009

③ 堂目卓生、経済学と人間学：歴史的考察、関西学院大学大学院経済学研究科夏季研究会、関西学院大学、2009年8月29日

④ 堂目卓生、スミスにとっての市場と規制、行動経済学研究センターシンポジウム、大阪大学中之島センター、2009年8月26日

⑤ Wakatabe Masazumi, The Kyoto University Economic Review(1926-1944) as Importer and Exporter of Economic Ideas: Bringing Lausanne, Cambridge and Marx to Japan, History of Economic Society, University of Colorado at Denver, June 27,2009

⑥ 若田部昌澄、経済危機と経済学：1970年代インフレ期の日本経済政策をめぐって、経済学史学会、慶應義塾大学、2009年5月31日

⑦ Junichi, Himeno, The New Design of the British Empire in Early Twenty Century, *The Workshop on the Empire, Integration and Economic Thought: British Empire and Economic Languages*, Landmark Tower, Yokohama National University March 28-29, 2009

⑧ Wakatabe Masazumi, The *Kyoto University Economic Review* (1926-1944) as Importer and Exporter of Economic Ideas, The Second ESHET-JSHET Joint Conference,一橋大学,2009年3月21日

⑨ Junichi Himeno, Reconsidering the definition of New Liberalism and its variants,International Workshop: "Cambridge, LSE, and the Foundations of the Welfare State: New Liberalism to Neo-liberalism, Mercury Tower, Hitotsubashi University, 13 March, 2009

⑩ Yasunori, Fukagai, National Economy, Peasant and the Land Tenure: Economic Thought of Ireland and British Empire, 1780s-1840s, UK History of Economic Thought Conference, University of Edinburgh, September, 3-5, 2008

⑪ Junichi Himeno, Rethinking on the British New Liberalism and Social Welfare, The Workshop on the Economic Thought, Yokohama, February 16, 2007

⑫ 姫野順一、1920 年代イギリスにおける改革思想の三類型、社会思想史学会（法政大学）、2006 年 10 月 26 日

〔図書〕（計８件）

① 姫野順一（単著）、『J.A.ホブスン　人間福祉の経済学　新自由主義の展開』、昭和堂、2010 年、pp.300

② 若田部昌澄、危機の経済政策－なぜ起きたのか、何を学ぶのか、日本評論社、2009 年、pp.314

③ 若田部昌澄、日本の危機管理力、PHP 出版社、2009 年、pp. 380

④ 深貝保則、「第 8 章　ウェルフェア、社会

的正義、および有機的ヴィジョン」『自由と公共性　介入的自由主義とその思想的起点』小野塚知二編著、日本経済評論社、2009 年、pp.253-284
⑤ 堂目卓生（単著）、『アダム・スミス『道徳感情論』と『国富論』の世界』、中央公論新社、2008 年、pp.　297 ページ
⑥ 若田部昌澄（部分執筆）「経済政策における知識の役割—思想・政策・成果—」野口旭編『経済政策形成の研究——既得観念と経済学の相克』、ナカニシヤ出版、2007 年、pp.32
⑦ 堂目卓生（部分執筆）『経済学名著と現代』、日本経済新聞出版社、2007 年、pp.23
⑧ 熊谷次郎（部分執筆）、「田口卯吉—社会の大理と経済学—」『日本の経済思想 I』、日本経済評論社、2006 年、xii＋pp.299

６．研究組織

(1)研究代表者

姫野順一（HIMENO JUNICHI）
長崎大学・環境科学部・教授
研究者番号：00117227

2)研究分担者

堂目卓生（DOME TAKUO）
大阪大学・経済学研究科（研究院）・教授
研究者番号：70202207
若田部昌澄（EAKATABE MASAZUMI）
早稲田大学・政治経済学術院・教授
研究者番号：00240440
深貝保則（FUKAGAI YASUNORI）
横浜国立大学・経済学部・教授
研究者番号：00165242
熊谷次郎
桃山学院大学・経済学部・教授
研究者番号：30047972
（H18-20：研究分担者）